

<研究ノート>

講義内容と関連のある逸脱行動が学生の学びに与える影響 ーリアルタイムアンケートツールを用いた探索的实践ー

Effects of deviation behaviors related to lecture content on student learning
- Exploratory practice using a real-time survey tool -

森口 文博*

Fumihiro Moriguchi

本稿では、教員自らが講義と関連性のある逸脱行動を講義に取り入れる効果を探索的に検証した。具体的には、リアルタイムアンケートツールを活用し、当日の講義内容と関連するテーマにて大喜利を実施し、学生の満足度、大喜利の参加状況と成績との関連性を分析した。結果、大喜利の参加状況と成績との間には、一部を除きほとんど相関関係が示されなかったが、学生の大喜利への評価は高く、講義に導入する一定の有益性が示された。

キーワード：逸脱行動、大喜利、リアルタイムアンケート、教育効果

I. はじめに

学生にとって1コマの講義に集中し、講義内容を理解・習得できることは重要なことである。しかし、学生が講義に集中できず、講義の受講から逸脱した行動をとるのは、どの大学でも日常的に見られる¹⁾。筆者の経験においても、講義中の私語やスマートフォンでの動画視聴、伏せ寝といった逸脱行動を目の当たりにしてきた。

こうした講義中の逸脱行動は、講義に悪影響であるとして、主に教育学や教育心理学の分野でその対策がいくつか提案されている。例えば、講義中の逸脱に対しては、口頭での注意があるが、個々の教員のレベルではなく、組織レベルでの厳格な対応が重要であるとされている¹⁾。逸脱行動の抑制の観点では、禁止事項を明文化したものを学生に配布したり、学生による授業評価に「この授業では、受講マナー（私語、携帯電話、遅刻、飲食等）について適切な指導がなされていた。」といった質問項目を設けることで、逸脱行動の抑止につなげている事例もある¹⁾。こうした講義内での規律付けや教員の指導態度は、学生の逸脱行動の抑止に有効であり、特に教員の指導態度では、受容的であり要求的な態度の両方を兼ね備えた指導が逸脱行動を抑制する可能性がある

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

(2024年3月5日受理)

©2024 Center for Promotion of Higher Education

報告されている²⁾。

一方で、経営学、特にイノベーションの文脈においては、逸脱行動がポジティブに捉えられている研究もある。革新的なアイデアや発明は「掟破り」を伴い、創造的逸脱 (creative deviance) という概念が提唱されている³⁾。日本でも創造的逸脱に関する実証研究があり、NTTの特許文献に記載のある発明者の引用データから、「発明者の逸脱度」と「発明の新規性」との関係を検証した結果、逸脱度が極端に高い・低い場合ではなく、中程度の逸脱的な発明者が革新的な成果を生み出しているとの報告がある⁴⁾

本稿は、逸脱行動のポジティブな側面に着目し、教員自らが講義と関連性のある逸脱行動を講義内に取り入れることによる効果を探索的に検証することを目的としている。このような探索的検証を行う着想に至ったのは、高田による先行研究⁴⁾から類推し、講義内容と関連する範囲で学生にとって関心の高いトピックや話題に逸脱をする場合、学生の興味を引き、学習意欲を高める可能性があると考えたためである。具体的には、リアルタイムアンケートツール Respon (レスポ) を用いて、当日の講義内容と関連するテーマにて大喜利を実施した。本稿での取り組み内容が、教育実践の一つの事例として参考となれば幸いである。

II. 取り組み内容

大喜利の取り組みは、流通科学大学で導入されているリアルタイムアンケートツール Respon を用いて実施した。Respon では、教員があらかじめ設定した設問に対して、学生が講義中にリアルタイムで回答し、回答結果をその場で学生に共有することができる。今回の取り組みは、Respon に搭載されている Room (ルーム) の機能を使用した。Room は、講義ごとに設定できるチャットのような機能であり、教員・学生が書き込んだコメントを学生全員がリアルタイムに閲覧できる機能である。学生の画面では、投稿者名が匿名で表示されることもあり、学生が投稿しやすいのが特徴である。ただし、教員のみ投稿者名を確認できることから、悪質な内容の投稿が抑止できる点にも特徴がある。

ルームエクササイズ (加點チャンス)

【お題 (大喜利 or IPPON グランプリ的)】

- ・ 本日は、企業内で新規事業を開発する形態・手法を学びました。
- ・ 「頑張って考えた新事業 (新製品・サービス) を上司に提案したら、却下されてしまいました。その理由は？」 (ボケてもOK)

- ・ ルームに思いついたもの投稿してみてください。
- ・ 皆さんの投稿の中で、「いいね」と思うものがあれば、ぜひ「★」をクリックください。
- ・ 森口が「なるほど」と思った真面目な回答を投稿した人
森口が「おもしろい」と思ったひねりのある回答を投稿した人
+αの成績評価加点をします。

既存事業があると、その事業の顧客がいたり、その事業のブランドイメージなどがあり、新事業との関係性が重要となります。今日の講義の内容を参考に、皆さんが所属する企業で新事業開発する場合、どの形態や手法がよいのかを検討する材料にいただければと思います。

図 1 Room 大喜利の出題例

取り組みは、筆者が2023年度前期・後期に担当した講義にて実施した。大喜利は、講義内容の説明終了後、講義の最後に実施した。大喜利は、その日の講義のテーマに関連するお題をスクリーンに投影し、学生が思いついた回答をRoomに自由に投稿できる形態とした。投影したスライド例は図1の通りである。大喜利は概ね3～5分実施し、学生の投稿に筆者がコメントをした。

2023年度前期に実施した3科目「経営戦略論A」「経営学入門」「現代にビジネス」は、学生の投稿の中で、「筆者が『おもしろい』と思ったひねりのある回答を投稿した人」「多くの投稿をした人」「★が多くついた人⁵⁾」に $+\alpha$ にて成績評価加点を実施した。

2023年度後期に実施した3科目「経営戦略論B」「デジタル社会の基礎知識(2コマ)」は、「大喜利の加点基準が「おもしろい」だけでは不公平である」との学生アンケートのコメントを受け、「筆者が『おもしろい』と思ったひねりのある回答を投稿した人」に加え、「筆者が『なるほど』と思った真面目な回答を投稿した人」に $+\alpha$ にて成績評価加点を実施した。また、前期の講義では「多くの投稿をした人」「★が多くついた人」を加点対象としていたが、無意味に多くの投稿をする学生、友人同士で★を相互に付け合う動きが見られたため、後期の講義では加点評価の基準からは除外した。

大喜利を実施した狙いは2点ある。第一に、学生自身が関心のあることを講義内容と紐づけて、自由な発想をもとに回答することを通じて、講義への参加意識を高めてもらうことである。学生間では投稿内容が匿名表記されるため、自身の意見やコメントを投稿することに対するハードルが下がると考え、大喜利の取り組みを実施した。

第二に、教員から通常の規範的な講義範囲を超えた許容可能な活動範囲を示すことで、規範的な講義にはない目新しさと楽しさを提供することである。講義内容からの完全な逸脱は、講義の本来の趣旨から遠ざかる一方で、規範に沿った厳格な講義は学生の集中力低下を招き、学生が自ら悪い逸脱を引き起こす可能性がある。規範的な講義形態から許容可能な範囲での逸脱、すなわち、講義内容に関連した逸脱行動を教員から示すことで、学生の学びにポジティブな影響を与えられるのではないかと考え、大喜利の取り組みを実施した。

今回の大喜利の取り組みに関して、実施した調査は以下の2点である。第一に、大喜利の取り組みに関するアンケート調査である。第二に、大喜利への参加状況と学生の成績との関係性の調査である。以下の3章、4章にてその調査内容、結果を順番に提示する。

Ⅲ. 大喜利の取り組みに関するアンケート調査

1. 調査方法

筆者が2023年度前期・後期に担当した6つの講義の最終回にて、アンケートを実施した。アンケートでは2つの質問を行い、Roomを活用した大喜利の取り組みに対する評価および意見を収集した。回答はResponを使用し、学生のスマートフォンにて回答をしてもらった。なお、回答に

については任意であり、回答を希望しない場合は、回答しなくてもよい旨、口頭にて説明を行った。
また、回答をしない場合でも、当該科目の成績には影響しない旨も合わせて説明を実施した。質問内容は以下の通りである。

Q1：ルームエクササイズ（大喜利・IPPON グランプリ⁶⁾）はどうでしたか？

□とてもよかった、□よかった、□どちらともいえない、

□よくない、□全くよくない（※単一選択方式）

Q2：ルームに関する意見・感想・こんな使い方あるのでは？など自由に記載ください

（特になければ、書かなくても OK）（※自由記入方式）

2. 調査結果

アンケートに関して、Q1 の結果は表 1 および図 2 の通りである。

表 1 Room 大喜利に対する評価 (Q1)

単位：人

科目名	開講時期	とてもよかった	よかった	どちらともいえない	よくない	全くよくない	回答者合計
経営戦略論 B	2023 年度後期	53 (46.9%)	52 (46.0%)	6 (5.3%)	2 (1.8%)	0 (0.0%)	113 (100%)
デジタル社会の基礎知識 (月曜 5 限)	2023 年度後期	31 (50.0%)	23 (37.1%)	7 (11.3%)	0 (0.0%)	1 (0.0%)	62 (100%)
デジタル社会の基礎知識 (火曜 4 限)	2023 年度後期	26 (59.1%)	16 (36.4%)	1 (2.3%)	1 (2.3%)	0 (0.0%)	44 (100%)
経営戦略論 A	2023 年度前期	21 (31.3%)	33 (49.3%)	12 (17.9%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	67 (100%)
経営学入門	2023 年度前期	29 (33.3%)	43 (49.4%)	12 (13.8%)	3 (3.4%)	0 (0.0%)	87 (100%)
現代ビジネス	2023 年度前期	31 (39.2%)	30 (38.0%)	18 (22.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	79 (100%)

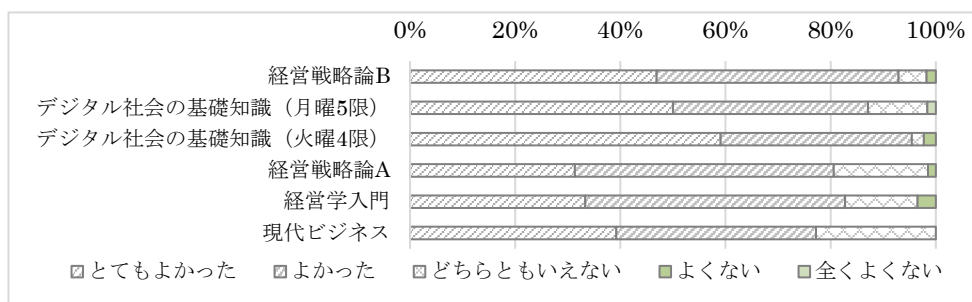


図 2 Room 大喜利に対する評価 (Q1)

現代ビジネス以外の5つの講義において、「とてもよかった」「よかった」の合計が、全体の80%を超える結果となった。現代ビジネスにおいても、「とてもよかった」「よかった」の合計が77.2%となっており、担当した6つの講義で実施した大喜利は、学生に受け入れられ、評価されたと考えられる。

Q2の自由記入回答については、質的データの分析に適したソフトウェアであるMAXQDAを用いて分析した。自由回答の得られた217件の回答のうち、「なし」「特になし」と回答のあった15件を除いた202件の回答を1件ずつ帰納的にコーディングしながら分類を行った。長文の回答などで、1件の回答に複数の内容が記載されているものについては、内容を解釈し、複数のコードに分類した。

コーディングの結果は、表2の通りである。223件の回答内容について、ポジティブな内容208件、ネガティブな内容15件に分類できた。さらに、ポジティブな内容をカテゴリーとして分類した結果、「取り組みの評価」「半匿名のリアルタイムアンケートツールのよさ」「楽しむ・考えるの両立」「その他」の4つのカテゴリーに分類された。以下の項にてそれぞれ説明する。

a. ポジティブな回答（208件）

第一に「取り組みの評価」である。このカテゴリーは、大喜利の取り組みを講義内に取り入れたことに関するものである。一定の評価基準を設け、学生の投稿内容が筆者に評価された場合に加点される形式であったことが、大喜利に参加するモチベーションにつながったとのコメントが多かった。また、少数ではあるが、講義の最後に実施される大喜利が、講義に参加するモチベーションとなっているとの回答もあった。講義の本筋ではない取り組みが、講義そのものに参加するモチベーションにつながっている学生がいた点は関心深い。この取り組みが、他の筆者以外の講義にはない取り組みであったこともあり、目新しさを感じ、今後も継続してほしいといった意見も複数見られた。

第二に「リアルタイムアンケートツールのよさ」である。Responに搭載されたRoomの機能に関する意見や感想である。Roomでは、学生が投稿した内容が即座に反映され、講義を受講している全員がスマートフォンで投稿内容を閲覧することができる。他人の意見を見ることができる点に関する回答が48件あり、他の回答を閲覧することで、自身の発想にはないアイデアが得られることを楽しみ、触発されている学生が多かったことが分かる。また、Roomは、投稿した人の名前が匿名化されて表示されることから、自らの意見や質問を投稿しやすいことを特徴にあげる回答も多く見られた。さらには、大喜利という主旨から、適当な内容を投稿しても咎められることはなく、むしろ面白ければ筆者に評価されるという点も、学生に受け入れられた理由の一つではないかと推察する。

第三に「楽しむ・考えるの両立」である。純粋に大喜利への参加が楽しいという回答、講義に

紐づいたお題の回答を考えることが有益であったとの回答が多く見られた。加えて、大喜利を通じて、楽しみながら講義のテーマを考えることができた点に価値を見出す回答も多く見られた。中には、大喜利が講義内容と紐づいていたことで、講義内容の理解や定着に役立ったという回答も見られた。これらの回答は、筆者の狙いである「講義と関連する逸脱が学生に与えたポジティブな影響」であると捉えられる。

第四に、上記には分類されない「その他」の回答である。ここでは、講義や大喜利に対する提案や筆者への御礼のメッセージ、意味不明・理解不能な回答もあり、これらをその他に分類した。

b. ネガティブな回答（15 件）

ネガティブな回答は、15 件と全体の 6.7%であった。大喜利そのものが難しいといった回答や講義の最後に実施するため、大喜利を実施しない回があった点に対する指摘があった。また、大喜利の加点者の採用基準が「筆者が『なるほど』と思った真面目な回答」「筆者が『おもしろい』と思ったひねりのある回答」であったことから、評価の不公平さを指摘したものがあり、この指摘は、今後の課題である。また、大喜利そのものがおもしろくない、不必要であるという回答も少数ながら見られた。

表 2 Room 大喜利に対する学生のコメント（自由記述）(Q2)

コード		頻度
ポジティブ		208
	取り組みの評価	19
	加点方式	10
	目新しさ	7
	講義に行くモチベーション	2
	リアルタイムアンケートツールのよさ	111
	他人の意見を見ることができる	48
	投稿・質問のハードルが下がる	48
	自分の意見を書き込める	11
	適当に答えても問題ない	4
	楽しむ・考えるの両立	56
	楽しみながら考える	18
	楽しい	35
	考える力がつく	3
	その他	24
	大喜利や講義に対する提案	11
	講義の感想	10
	意味不明・理解不能	3
ネガティブ		15
	難しい	4
	時間ギリギリになる	2
	回数が少なかった	2
	講義と関連のないテーマだった	2
	加点者の採用基準	2
	いらない	1
	楽しい雰囲気がない	1
	使いにくい	1

IV. 大喜利への参加と学生の成績との関係性

1. 調査方法

筆者が 2023 年度前期・後期に担当した 6 つの講義のうち、定期テストを実施した 4 科目について、学生の大喜利の参加状況と成績の関連性について相関分析を実施した⁷⁾。変数の定義は、表 3 の通りである。「大喜利参加率」「平均投稿回数」は、学生の大喜利の参加状況に関する変数であり、講義内容に関連する逸脱の代理変数としていずれも設計している。大喜利は、講義内容の説明後、実施時間が残っている場合に実施したため、各講義で大喜利を実施した回数が異なることから、大喜利実施回数あたりの参加率を「大喜利参加率」、大喜利実施 1 回あたりの学生の投稿回数を「平均投稿回数」として、それぞれ採用した。また、これらの大喜利への参加状況に関する指標と、成績との関連性を調査するため、成績の評価指標として「課題提出回数」「成績」をそれぞれ設計した。

表 3 相関分析に関する変数定義

変数	定義
大喜利参加率	大喜利の参加回数÷大喜利の実施回数。 大喜利への参加度合いの代理変数として定義した。
平均投稿回数	1 回の大喜利における投稿回数÷大喜利の実施回数。 大喜利参加への積極性に関する代理変数として定義した。
課題提出回数	講義後の課題提出回数 ⁸⁾ （最大 15 回・提出期限は次回講義前日）。 講義への参加姿勢の代理変数として定義した。
テスト点数	定期テストでの獲得点数 ⁸⁾ 。 講義の理解度の代理変数として定義した。

2. 調査結果

相関分析の結果は、表 4 の通りである⁹⁾。一番上の表が全講義のデータを合算して実施した相関分析の結果であり、以降に各科目の相関分析の結果を示している。一部の科目を除き、大喜利の参加に関する指標と成績に関連する指標の間には、ほとんど相関関係は見られなかった。以下では、個別の講義に関する分析結果を説明する。

2023 年度後期に実施した経営戦略論 B では、大喜利の参加と成績に関連する指標の間にほとんど相関がないことが分かった。一方で、2023 年度前期に実施した 3 科目については、個々の指標間で、弱い正の相関が示された項目がいくつかあった。特に、経営戦略論 A では、「大喜利の参加率」「平均投稿回数」と「課題提出回数」間の相関係数が 0.30 を上回り、「大喜利の参加率」「平均投稿回数」と「テスト点数」間の相関係数が 0.40 を上回る結果となっていた。経営学入門および現代ビジネスにおいては、「大喜利の参加率」と「課題提出回数」間の相関係数が 0.30 を上回る結果となっていた。

V. 考察

アンケート調査 Q1 の結果、Room を用いて実施した大喜利は学生から概ね高評価であったと言える。学生からの評価は、前期に実施した科目よりも、後期に実施した科目の方が高かった。これは、前期のアンケート調査の意見を取り入れ、後期の講義では大喜利の加点対象を変更したことが要因ではないかと推察する。また、Q2 の自由記入コメント・意見からも、大喜利が、学生の講義への参加意欲を高めている可能性が示唆された。講義内容から許容可能な逸脱範囲を教員自らが示す取り組みは、大半の学生にポジティブに捉えられていた。

一方で、大喜利への参加と学生の成績との間には、一部の科目を除きほとんど相関関係は見いだされなかった。また、一部の科目の弱い正の相関関係についても、疑似相関の可能性も考えられる。例えば、個々の能力値が高い学生ほど、大喜利に積極的に参加し、成績も高くなるという関係性であり、大喜利への参加と成績との間には、直接の関係性がないことも考えられる。大喜利そのものが学生に受け入れられ、ポジティブに評価されたこともあり、この取り組みをいかに学生の講義内容の理解度や成績の向上につなげていくかが課題である。

表 4 相関分析の結果

<u>全講義集計</u>	大喜利参加率	平均投稿回数	課題提出回数	テスト点数
大喜利参加率	1			
平均投稿回数	0.67	1		
課題提出回数	0.26	0.20	1	
テスト点数	0.14	0.21	0.14	1

<u>経営戦略論 B</u>	大喜利参加率	平均投稿回数	課題提出回数	テスト点数
大喜利参加率	1			
平均投稿回数	0.79	1		
課題提出回数	0.04	0.03	1	
テスト点数	0.05	0.14	0.04	1

<u>経営戦略論 A</u>	大喜利参加率	平均投稿回数	課題提出回数	テスト点数
大喜利参加率	1			
平均投稿回数	0.68	1		
課題提出回数	0.35	0.31	1	
テスト点数	0.42	0.42	0.26	1

<u>経営学入門</u>	大喜利参加率	平均投稿回数	課題提出回数	テスト点数
大喜利参加率	1			
平均投稿回数	0.66	1		
課題提出回数	0.37	0.27	1	
テスト点数	0.19	0.21	0.10	1

<u>現代ビジネス</u>	大喜利参加率	平均投稿回数	課題提出回数	テスト点数
大喜利参加率	1			
平均投稿回数	0.58	1		
課題提出回数	0.40	0.18	1	
テスト点数	0.05	0.25	0.04	1

VI. おわりに

本稿では、講義における逸脱行動に着目し、調査・検証してきた。先行研究においては、学生が講義から逸脱した行動を取ることに對する悪影響と、教員側がいかにそれに対処をするかに焦点が当たっていた。本稿では、教員側があえて、学生を講義内容から許容される範囲で逸脱する方向に誘導することを試み、その効果を検証した。

本稿で示した講義内容と関連する逸脱行動は、学生に評価され、受け入れられたという点においては、他に参考となる取り組み事例となったと考える。ただし、これらを本来の講義が意図する教育効果に結び付ける知見が不足しており、今後の課題となった。今後は、別の変数設計による定量的な実証研究や個別の学生に対するインタビューを行うなどの質的な調査・検証が必要となるだろう。

引用文献、注

- 1) 葛城浩一:「授業中の逸脱行動に対する大学の対応—ボーダーフリー大学に着目して—」,『香川大学教育研究』10, (2013) 51-61.
- 2) 平井直美・水野治久:「中学生の授業逸脱行動を抑制する要因の検討—学級風土と教師の指導態度の視点から—」,『大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学』65, No.2 (2017) 271-283.
- 3) Mainemelis, C: “Stealing fire: Creative deviance in the evolution of new ideas”, *Academy of Management Review*, 35(4) (2010) 558-578.
- 4) 高田直樹:「発明者の逸脱行動と発明の新規性: 指標構築を通じた探索的分析」,『日本経営学会誌』45 (2020) 54-66.
- 5) Room における「★」とは、多くの SNS で使用されている「いいね!」ボタンの機能に似ており、共感するコメントに学生・教員がタップすることで☆が塗りつぶされ★に変わる機能である。
- 6) IPPON グランプリとは、お笑い芸人が大喜利を行うフジテレビのバラエティ番組である。
- 7) デジタル社会の基礎知識は定期テストを実施せず、レポートによる評価を実施したため、相関分析の対象科目から除外した。
- 8) 相関分析の対象講義は、毎回の講義後に課す課題の提出状況 40 点、定期テスト 60 点で成績評価した。
- 9) 本来、科目ごとに各変数の基本統計量を示すべきであるが、紙幅に限りがあり、省略した。